

# 登場人物



大久保 利通  
Toshimichi Okubo

## 西郷と駆け抜けた人生

西郷隆盛・木戸孝允とともに「維新の三傑」と呼ばれる人物。貧しい武士の家に生まれ、幼少期に西郷らと同じ郷中で成長します。西郷と共に幕末から明治の日本を駆け抜け、近代日本の基礎をつくりましたが、西南戦争の翌年、明治11(1878)年、東京の紀尾井坂にて暗殺されました。

## 西郷どんの足跡



南洲墓地  
- 鹿児島市 -

西南戦争で亡くなった私学校軍2023名が眠る墓地。西郷もここに埋葬され、それを中心に共に戦った篠原国幹、桐野利秋、村田新八たちや西郷を慕って西南戦争に参加した県外出身者たちの墓が並んでいます。また、幕末以後交流のあった勝海舟が西郷のために詠んだ歌碑も建てられています。

【住所】  
鹿児島市上竜尾町2番地1号(南洲公園内)  
【問い合わせ先】  
西郷南洲顕彰館 Tel.099-247-1100

祝 2018年 明治維新150周年幕開け & 西郷どん放映!



歴史深掘り  
ストーリー

本文：南九州歴史学会  
画：KENRO  
監修：徳永 和喜(西郷南洲顕彰館)

第6話

西郷と大久保

西郷と共に育ち、活躍した大久保。幼いころから共に過ごし、激動の時代を駆け抜けた西郷と大久保。今回は、明治維新という偉業を成し遂げた二人の薩摩藩士のお話。

### 郷中での二人

西郷を取り巻く人物の中で、最も近くで共に歩んできた盟友として真っ先に名前が挙がるのが、大久保利通でしょう。彼らの親交は幼少期から始まります。大久保はもともと高麗町の生まれでしたが、西郷の住む下加治屋町に一家が引越してきたことで、二人は同じ郷中(地域の自治組織)で成長していきます。大久保の日記には、郷中教育の中で行われていた年中行事の一つである妙円寺参りに、西郷を含む郷中の若者と一緒に参加したことも出てきます。実は二人の生活ぶりは、どちらも貧しい武士の家柄であったため非常に質素なものでした。特に大久保はお遊羅騒動によって父・利世が喜界島に流され、利通自身も失職し、大変な苦難と貧乏を味わうこととなります。そんな彼を支えたのも、西郷ら周囲の人々でした。

### 激動の時代の中で

この二人の絆は、時代の荒波の中でより強まっています。西郷が安政の大獄から逃れるため、藩から奄美に潜居(隠れ住むこと)を命じられていた際、二人は多くの書状を交わしました。ふさいだ気持ちを吐露する西郷、それを気遣うかのように政治情勢を

勃発。大久保は当初西郷は関与していないと信じていたようですが、戦争の動きは止められず、同年九月、西郷戦死の知らせを聞きます。冷静沈着で知られる大久保でしたが、この時ばかりは取り乱しながら深く嘆いたと言われています。大久保はそれでも近代国家への歩みを一刻でも早く進めるべく、国づくりに邁進していききましたが、歴史はそんな大久保にも非情な結末を与えました。明治十二(一八七九)年五月十四日、出勤途中に大久保を乗せた馬車が紀尾井坂を通りかかったところ、不平士族の島田一郎らに襲撃され、絶命します。彼の遺体の懐には血で染まった手紙があり、それは西郷からのものであったとも言われています。

### 二人の絆

最後に、西郷と大久保が互いにどの

伝える大久保。こうした書状からは当時の二人の関係が垣間見えるようです。

そんな中、藩の実権を握っていた島津久光の下で奔走していた大久保は、変革の時代を迎えんとする薩摩、そして日本には西郷が不可欠で、早急に西郷を呼び戻すよう久光に進言します。しかし、復帰した西郷はその直後、命令を無視したことなどから久光の激しい怒りを招きました。大久保はこの状況を悲観し、西郷と共に差し違えて死ぬ覚悟だと告げますが、西郷は二人が死んだら斉彬公の遺志を誰が継ぐのかと大久保を諭し、遠島処分を受けられます。

このように、互いの窮地を支え合いながら彼らは、江戸幕府に終止符を打たせ、新たな時代、明治をつくりあげていくこととなります。

### 新時代、そして別れ

明治時代を迎えると、二人は共に新政府の中で要職に就き、近代日本の礎をつくるべく諸制度を整えていきます。そんな中、彼らの袂を分かつ出来事が起こります。それが明治六(一八七三)年に起こった外交問題(明治六年の政変)でした。二人は意見を対立させ、西郷は鹿児島へと下野します。そして明治十(一八七七)年二月、ついに西南戦争が

ような思いを持っていったのかをうかがえるエピソードを紹介しましょう。

西郷落命の知らせを受けた大久保は嘆きながらも、西郷の思いを後世に伝えられる者は自分しかない、近代日本の歴史研究の第一人者である重野安繹(やすむつ)に西郷の伝記の執筆を依頼しています。

また、幕末に西郷が政治的な危機にひんした際、同志の一人であった伊地知良馨(よしか)が、国元にいる大久保に来てもらい協力を仰いでどうかと進言しましたが、西郷は反対します。「自分がもし死ぬようなことがあれば、代わって起つべき者は大久保である。もし共に死ぬようなことになれば、後はどうにもならぬのではないかと。このように、互いに信頼しあった二人が成し遂げられたと言えるのではないのでしょうか。

【完】